16世紀後期における
イングランドースペイン戦争

川　瀬　　進

目　次

Ⅰ．はじめに
Ⅱ．フェリペⅡ世の政策
Ⅲ．アルマダ
Ⅳ．1588年の対スペイン戦争
Ⅴ．おわりに

Ⅰ．はじめに

14世紀後期以来，ポルトガルおよびスペインは，未知の世界を求めて，競って海外進出を試みた。この両国が海外進出を試みた背景には，当然，長距離航海可能な造船技術の発展，航海術の発達および保存食品の進歩があった。この結果，15世紀末の地理上の大発見を契機に，ヨーロッパ各国は，植民地獲得へと乗り出したのである。

スペインは，1556年にフェリペⅡ世（Felipe Ⅱ : Philip Ⅱ）が，国王につくやいなや，勢力的に植民地獲得に乗り出したのである。植民地経営から得られる大量の金・銀は，スペイン海軍を増強するのに役立ち，オスマン＝トルコ艦隊を打ち破ることができたのである。

オスマン＝トルコ艦隊を打ち破ることによってスペインは，地中海沿岸を掌握し，スペイン海軍の力を全世界に示したのである。また，このことがきっかけとなってスペインは，しだいに大陸にも力を伸ばしはじめ，地中海沿

岸諸国，ネーデルランド，メキシコ，西インド諸島等を支配するようになったのである。

だが，ヨーロッパ大陸で絶大な権力をふるっていたフェリペⅡ世にも，しだいにかげりが出はじめたのである。それは，イングランドの女王・エリザベスⅠ世（Elizabeth Ⅰ）との対立である。この対立の直接原因は，カトリックであるフェリペⅡ世が，エリザベスⅠ世のプロテスタントを否定したからである。

この宗教戦争から端を発して，イングランド王立海軍は，1588年にイングランド海峡で，スペイン海軍（アルマダ）を撃破したのである。当時ヨーロッパの制海権を掌握し，全世界に猛威をふるっていたスペイン海軍（アルマダ）が，いとも簡単に，1588年に撃破されてしまったのである。

この1588年の海戦において，イングランド王立海軍が，ヨーロッパの制海権をスペインから奪取したかのように見えたが，それは，間違いである。というのは，この1588年の海戦においてスペイン海軍は，かなりのダメージを負ったが，この海戦をも含めて計５回ほどイングランド王立海軍と戦っていたからである。

スペインにとってこの海戦は，長い海戦史における１ページにすぎなかったのである。

当時のスペインの国力および造船技術からして，この海戦で撃破されるなど，とうてい考えられないことである。

でも実際には，スペイン海軍（アルマダ）の敗退である。

そこで本稿では，16世紀中葉のスペイン情勢を念頭に置き，1588年の対スペイン戦争において，なぜイングランド王立海軍が，勝利を収めることができたのか，またそれには，イングランド政府のどのような努力があったのかをも考察する。

Ⅱ．フェリペⅡ世の政策

スペインの植民地熱は，女王イサベルⅠ世（Isabel Ⅰ）がコロンブス（Columbus）に，探検航海に必要な費用を与えたことにはじまる。この植民地熱，いわゆる帝国熱は，カールⅤ世（Karl Ⅴ），そしてその息子フェリペⅡ世にも受け継がれ，16世紀中葉にはかなり具現化されていたのである。

実際，スペインが本格的に新大陸を求め，植民地活動を行ったのは，ハプスブルク（Habsburg）家が2つに分かれてからのことである。すなわち，カールⅤ世がドイツ皇帝とスペイン王を兼ねていたが，1555年にアウグスブルクに平和をもたらした[1)]アウグスブルク宗教和議（Augsburger Religionsfriede）の結果，翌年の1556年に，自分の弟フェルディナンドⅠ世（Ferdinando Ⅰ）にローマ皇帝の皇位とドイツ，イタリー，また自分の息子フェリペⅡ世にスペイン王位とネーデルランド，ナポリ，ミラノ，アメリカ植民地を譲り与えた後である。

この1555年のアウグスブルク宗教和議は，それ以降のフェリペⅡ世の政策に，かなりの影響を持っていたのである。そこで次に，1555年のアウグスブルク宗教和議とは，どのようなものであるか，またそこに達するまでの経緯を考える。

この1555年のアウグスブルク宗教和議は，1546年のシュマルカルデン（Schmalkalden）戦争[2)]，すなわちカトリック教徒であるカールⅤ世と，プロテスタント教徒との抗争である。

カールⅤ世は，治世当時，自らの地位を確保するために，プロテスタント

注1）Pollard, A. F., The History of England from the Accession of Edward Ⅵ. to the Death of Elizabeth 1547－1603, in William Hunt and Reginald L. Pool, eds., *The Political History England,* Vol. Ⅵ, Longmans, Green, and Co., 1910, p. 213.

2）Reign of Edward Ⅵ, in James Anthony Froude, ed., *History of England,* 5, Ams Press, Inc., 1969, p. 20.

教徒からなるイングランドとシュマルカルデン同盟[3]を穏やかに押えつけて，自国領土をカトリック教派にしなければならなかったのである。

だが，1545年にシュマルカルデン同盟のプロテスタント教徒たちは，カールV世の要望を拒否したのである。

この拒否について，カールV世が強権を発動して武力でこのシュマルカルデン同盟を制圧していたら，何も問題は起きなかったのである。だが，1545年当時，しだいにプロテスタント教徒が力を持ちはじめ，カトリック教徒と勢力を2分するまでに拡大していたので，カールV世は，シュマルカルデン戦争（1546－1547）へと突入せざるをえなかったのである。

結果的には，カールV世が勝利を収めることができたのである。

だが，ここで注意しなければならないことが2つある。その1つは，その後のプロテスタント教徒の勢力がヨリ拡大していったこと。2つ目は，カールV世の側近であったザクセン侯モーリッツ（Maurice, Duke of Saxe）が，もとの教派であるプロテスタントに寝返ったことである。このことは，当然カールV世の権威失墜と軍事力衰退とを意味しているのである。

いつの時代でも，自己の私利私欲のため仲間を裏切るということは，残念なことである。だが，これも我が身がかわいいため，やむをえないことかもしれない。再び，元の鞘に収まったモーリッツを，イングランド側では，いかがわしい人物[4]として見ていたようである。

これらの経緯を見極めていたフェリペII世は，1556年にスペイン王になるやいなや，カトリック教徒の代表者となり，プロテスタントへの迫害を続けるとともに，世界の王になるための抗争を続けたのである。この背景には，当然，広大な領土から得られる豊富な租税，すなわち十分な軍資金が蓄えられていたのである。

3）Fisher, H. A. L., The History of England from the Accession of Henry VII. to the Death of Henry VIII., 1485－1547, in William Hunt and Reginald L. Pool, eds., *The Political History of England,* Vol. V, Longmans, Green, and Co., 1906, p. 439.

4）*cf.* Pollard, A. F., *op. cit.*, p. 98.

フェリペII世にとっては，当時の宗教戦争，いわゆるイングランドを制圧しない限り，世界の王に成り得ないのである。そこでフェリペII世の国策は，当然イングランドを自分の支配下に置くことからはじまったのである。

イングランドを支配しようとするフェリペII世の念は，彼がエリザベスI世に対し，オランダやゼーラント（Holland and Zealand）を統治するように命じたが，彼女がこれを1576年に断わった[5]ころから，しだいに強くなってきたのである。

イングランドを支配下に置く具体策としてフェリペII世は，スペイン海軍を増強してアルマダ[6]を結成させ，そしてそのアルマダを護衛艦隊として，パルマ公（Duke of Parma）の陸軍をイングランドのテムズ川河口に上陸させたのである[7]。

また，ネーデルランドに対しては，1556年の即位後すぐに，財政をヨリ豊かにするために重税を課したり，「言語や慣習」についてまったく理解を示さず[8]，プロテスタントの一層の取り締まり[9]のためマルゲリータ（Margherita di Parma : Margaret, Duchess of Parma）を赴任させたのである。

ネーデルランド人にとっては，このフェリペII世の政策に我慢できるわけがない。

そこで，ネーデルランド人は，フェリペII世に対して，高課税の廃止，駐留軍の退去および宗教裁判所[10]の設置無効を要求したのである。すなわち，

5）*Ibid.*, p. 344.

6）この当時のスペイン海軍を一般に“無敵艦隊（Invincible Armada）”と称している。この呼び名は，イングランド側のものであり，スペイン側では“最幸福な艦隊（Felicísimo Armada）”と称しているのである。本稿では，ただ単にアルマダと称することにした。

7）Mattingly, G., *The Defeat of the Spanish Armade,* Jonathan Cape, 1959, p. 81.

8）Reign of Elizabeth Pt. III, in James Anthony Froude, ed., *History of England,* 9, Ams Press, Inc., 1969, p. 309.

9）*Ibid.*, p. 315.

10）Robinson, C. E., *England,* Thomas Y. Crowell Company, 1928, Second Printing, p. 171.

ネーデルランドの貴族は，フェリペⅡ世の独裁制を拒否したのである[11]。

もしここで，フェリペⅡ世がネーデルランド人の要求をある程度認めていたならば，1568年のフリースラント（Friesland）の戦いは行われておらず，ネーデルランドからオランダが独立せず，アルマダがイングランド王立海軍から撃破されていなかったように思われるのである。

というのは，地中海の中心商業都市であるネーデルランドが，スペインの属領という状態にとどまっておれば，そこから得られる多大な税，および海上戦での好都合な地形がそのままスペインのものであったからである。いいかえると，スペインは，莫大な軍事費と良港を含む軍事的な地理的条件とを兼ね備え，イングランド王立海軍に対して脅威を与え続けることができたからである。

だが，フェリペⅡ世は，1部の駐留軍の退去を命じただけで，依然として専制政治を行ったのである。

フェリペⅡ世の専制政治に対するネーデルランド人の反感感情は，北部のプロテスタント教徒および南部のカトリック教徒をも含む全ネーデルランド市民を，武力闘争へと駆り立てたのである。たとえば，1567年のスペイン親方に対するネーデルランド人の反乱[12]である。

では，なぜ宗教戦争まで行っているカトリック教徒とプロテスタント教徒とが，ここネーデルランドで手を結び合うことができたのであろうか。その理由は2つあるように思われる。すなわち第1に，ネーデルランドがもともと中世以来17州の独立した共和国家であり，ハープスブルク（Habsburg）家の所領といえども，各州の自由が約束されていたからである。ここでいう自由というのは，ハープスブルク家からの介入，すなわち17州の各州議会および全ネーデルランド議会の議決に関して口出ししない，ということであ

11）In J. A. Froude, ed., *History of England,* 9, *op. cit.*, p. 314.

12）Helleiner, K. F., The Population of Europe from the Black Death to the Eve of the Vital Revolution, in E. E. Rich and C. H. Wilson, eds., *The Cambridge Economic History of Europe,* Vol. Ⅳ, Cambridge University Press, 1980, p. 72.

る。要するに，ネーデルランド内のスペイン駐留軍の存在を認めないということである。第2に，ネーデルランドに対する重税，すなわち経済的抑圧がすべてスペイン本国の利益のためになされていたからである。

このネーデルランド全市民の武力闘争は，当然のごとく反乱という形で表面化して来たのである。

1565年のネーデルランド北部の反乱重鎮者・オラニエ公ウイレム（Willem : Willam of Nassau, Prince of Orange）[13] は，ドイツの軍隊や自分の弟ルイ（Louis of Nassau）の救援により，ネーデルランドの総督・パルマ公妃マルゲリータ（Margherita di Parma : Magaret, Duchess of Parma）の軍隊を撃破させることができたのである。この反乱でフェリペII世は，たとえマルゲリータの軍隊が小規模で負けたとしても，自分の政策に汚点を残すとして，即アルバ公（Duque de Alba : Duke of Alva）を，1567年に派遣させたのである[14]。

だが，フェリペII世は，このネーデルランドをあまり重要視していなかったように思われる。というのは，スペインの軍資金を捻出できるこのネーデルランドに，マルゲリータの小規模軍隊しか駐留させていなかったからである。

アルバ将軍の行動は，“アルバの血の裁判[15]”ともいわれるほど非道極まるものであった。たとえば，猛将アルバに捕えられたネーデルランド市民は，アルバ軍の進撃のため，いいかえると戦費のために，すべての財産を没収されたり，また再度，重税（特に毛織物工業）が課せられたのである。そして，それらに背いたネーデルランド人は，1568年から1573年の間に，“アルバの血の裁判”のもとに，7,000人弱のものが処刑されたのである[16]。こ

---

13) In J. A. Froude, ed., *History of England,* 9, *op. cit.*, p. 316.
14) *Ibid.*, p. 317.
15) Reign of Elizabeth Pt. IV, in James Anthony Froude, ed., *History of England,* 10, Ams Press, Inc., 1969, p. 393.
16) Helleiner, K, F., *op. cit.*, p. 36.

のようなことでは，カトリック教徒であろうと，またプロテスタント教徒であろうとも，特に毛織物工業者にとっては，アルバ公の政策を非道極まるものと考えざるをえないのである。

この点においても，フェリペⅡ世がとった政策は失敗であった。というのは，ネーデルランドの反乱を早急に鎮圧するために派遣した将軍に人選ミスがあったからである。いいかえると，フェリペⅡ世がアルバ公の性格，能力を良く知っておらず，ネーデルランド市民の反感感情をヨリ強固なものにしたからである。

アルバ公の非道のため，いいかえるとフェリペⅡ世の失策のため，1568年ネーデルランド北部のフリースラントから戦争が勃発したのである。このフリースラントの戦いは，ネーデルランドがスペインから自由を勝ち取り，自治を回復させるために行われた戦いであり，結果的には，ネーデルランドからオランダが独立する戦争（1568－1648）である。

次に，ネーデルランドからオランダが独立するきっかけになった非常に重要なフリースラントの戦いを考える。

なぜ，このフリースラントの戦いが非常に重要であるかというと，オランダが独立するにあたり，イングランドがかなり関与しており，その関与がスペイン帝国を衰退させる直接原因になったからである。いいかえると，オランダは，イングランドの支援を受けて独立することができたのであり，そのイングランドの支援，いわゆるイングランド王立海軍の支援が，フェリペⅡ世を激怒させ，アルマダとの激突という結果になったのである。

フェリペⅡ世の野望は，全世界を征服することにある。その野望を打ち砕く行為に関しては，徹底的に報復手段に出たのである。

1568年のフリースラントの戦いにおいて，猛将アルバは，ネーデルランド南部のアントウェルペン（Antwerpen）に本部を置き，ここからネーデルランドの陸海を統轄しようとしたのである。

ここでまたアルバ公は，非道ともいえる行動に出たのである。すなわち，自分の政策に反対するホールン（Horn）伯およびエグモント（Egmont）伯

を，“血の裁判”のもとで処刑したのである[17]。

これに対してオラニエ公ウイレムは，ドイツで兵を集め，ここフリースラントで戦ったが，第3回目でやっと勝てたものの，アルバ軍の猛威に負け，再び敗退したのである。

フェリペII世は，全ネーデルランド市民から嫌われ，またスペイン自国軍の多大な犠牲を払ってまでも，自己の政策を貫徹するために，このネーデルランドを死守したかったのである。このフェリペII世の死守の仕方は，いいかえると，スペイン軍と，反政府軍との戦いは，その戦いが激しいだけに，オランダ独立戦争の序曲ともいえるのである。

オラニエ公ウイレムに勝った猛将アルバは，その勢いとともに戦費を捻出するために，ますますネーデルランド市民に対し重税を課したのである。この重税は，富裕なネーデルランド市民を外国に追いやったり，そうでない市民を略奪者に変身させたのである。当然のごとくネーデルランドの社会は，商工業が衰退化し，失業者が多くなり，略奪者が横行する危険な情勢になってきたのである。

そこでこの情勢を改善するために，いいかえるとフェリペII世の政策を打ち破るために，オラニエ公ウイレムの弟ルイは，その失業者たち，特にカルヴィン派の貴族たちに特別免許状を与え，ゼーラントおよびネーデルランド沿岸のスペイン船およびその軍需品を公的に略奪させたのである。

ルイに公的特別免許状を与えられたカルヴィン派の失業者たちは，ネーデルランド沿岸や沖でゲリラ戦を好む「海乞食（gueux de mer : sea beggars）」[18]になり，フェリペII世の軍艦やカトリック教徒の軍隊を襲ったのである。「海乞食」たちは，イングランド政府の支援をも受け，スペイン政府に対する反政府軍を拡大させていったのである。アルバ公の悪政によって生み出さ

17）In J. A. Froude, ed., *History of England,* 9, *op. cit.,* p. 320.

18）Black, J. B., The Reign of Elizabeth 1558－1603, in George Clark, ed., *The Oxford History of England,* VIII, Second Edition, Oxford University Press, 1976, p. 127.

れた「海乞食」[19]は，アルバ公を失脚への道へと導いたのである。すなわち，イングランド政府の支援を受けて拡大していった反政府軍に対して，もはや猛将アルバ公は，なすすべがなく，1572年失脚へと追い込まれていったのである。

そこで，オランダ独立戦争が本格化し始めてきたのである。

もし，1572年のゼーラントの戦いでフェリペⅡ世が，世界最強であるスペイン海軍をネーデルランド沖に集結させていたら，猛将アルバ公は，失脚せずにすんでいたであろう。また，オランダの独立戦争も本格化していなかったであろう。というのは，当時，1571年のレパント海戦（Battle of Lepanto）で大勝利を得た[20]スペイン海軍が，全世界に対して世界最強海軍であることを見せつけていたからである。

Ⅲ．アルマダ

スペインのアルマダが組織された最大の理由は，フェリペⅡ世の野望の具現化である。すなわち，フェリペⅡ世が世界制覇を完成させるための第１の政策として組織されたのである。これを具体的にいうと，スペイン帝国を脅かし続けているイングランド王立海軍に対抗するために組織されたのである。

16世紀中葉スペインは，世界最大の国家であり，軍事力は世界№１であった。この№１の海軍力を誇示したのは，レパント海戦である。

このレパント海戦の直接原因は，ヴェネツィア領のキプロス（Cyprus）島の領有問題[21]をめぐって，1570年にオスマン＝トルコがこの島を力ずくで制圧したことによるのである[22]。

19）Pollard, A. F., *op. cit.*, p. 305.

20）*cf.* Parker, G., *The Military Revolution,* Cambridge University Press, 1988, p. 87.

21）オスマン＝トルコは，ヴェネツィア共和国がキプロス島を植民地にする前に，キプロス島がイスラム王国に属していたので，その返還を求めていたのである。

22）オスマン＝トルコ軍がキプロス島を力ずくで制圧した理由は，1538年のプレヴ

（次頁脚注へ続く）

当時オスマン＝トルコの政策の第1目標は，地中海の制海権を握掌し，スペインよりもヨリ優位に立つことであった。この政策からいくと，軍事上重要なキプロス島を領有することが，オスマン＝トルコにとって絶対に必要な事柄なのである。

だが，キプロス島を領有しているヴェネツィアにとっては，死活問題である。そこでヴェネツィアは，即カトリック教諸国に救援を求めた。だが，どこのカトリック教諸国においても良い返事がもらえず，唯一耳を傾けてくれたのは，教皇ピウス5世（Pius V）であった。この教皇ピウス5世が働きかけて，ヴェネツィア，スペイン，カトリック教国による「反トルコ神聖同盟」[23]，いいかえると「スペイン神聖同盟（The Holy League of Spain）」[24]が結成され，1571年のレパント海戦に突入したのである。

ここで1つ考えなければならないのは，教皇ピウス5世の行動である。ピウス5世は，ただ単に博愛の精神だけでヴェネツィアの救援を受け入れたのであろうか。答えはNoである。というのは，当時ヴェネツィアは共和国であるために，カトリック教のすべての国王から無視されていたからである。

では，なぜピウス5世は，自ら骨を折り「反トルコ神聖同盟」，すなわちカトリック同盟艦隊を結成したのであろうか。それは，ピウス5世・自らの立場上，そのような行動をとらなければならなかったのである。もう少し具体的にいうと，オスマン＝トルコ軍が西進のため，地中海の制海権に脅威を与え，イタリアに進攻する恐れがあったからである。このようなトルコ艦隊の進撃が，カトリック教諸国の貿易を妨げ，ひいてはカトリック教国の存在

ェザの海戦（Naval Battle of Preveza，トルコ軍の大勝利）のつもりで，1565年にマルタ（Malta）島に攻撃をしかけたが，結果的にその攻略に失敗したからである。このマルタ島は，地中海商業にとって重要な場所である。この島を領有にするかしないかは，その国の貿易発展にかかわる重要な問題である。そこでこのマルタ島は，古くから地中海商業の繁栄をつかさどるとともに，戦場の島でもあった。

23) In M. E. Mallett and J. R. Hale, eds., *The Military Organization of a Renaissance State,* Cambridge University Press, 1984, p. 236.

24) Guilmartin, J. F., *Gunpowder and Galleys,* Cambridge University Press, Reprinted, 1980, p. 237.

すらも脅かしていたからである。

そこでピウス5世は，スペインに対し，毎月40,000クロウン，合計200,000クロウンの戦費と軍事援助とを申し出たのである[25]。

このピウス5世は，フェリペII世やアルバ公と同様，イングランドをも征服しようとする野心を持った人物である[26]。

レパントは，ギリシア本土とペロポネソス（Peloponnesus）半島にはさまれたコリント湾（Gulf of Corinth）の中間北，ギリシア本土の地方である。

このレパント海戦に臨むにあたって，カトリック同盟艦隊の総指揮官，フェリペII世の異母弟オーストリアのドン・ジョン（Don John of Austria）[27]は，キャノン砲装備のガレアス（Galeass）船をシチリア（Sicilia）島北端，メッシナ（Messina）海峡に集結させたのである。

ドン・ジョンは，ヴェネツィア所有の超大型ガレアス船[28]の機能を十分に発揮するために，かなり組織だったスペイン艦隊のガレイ（Galley）船ではなくて，このガレアス船を，トルコ艦隊の前面に出して戦ったのである。このことは，ドン・ジョンの戦術の正しさと，ガレアス船の優秀さとを物語るのである。すなわち，ドン・ジョンは，レパント海戦においてスペインに大勝利をもたらしただけではなく，スペイン人の“魂”をもよみがえらせたのである[29]。

一方，オスマン＝トルコ艦隊は，イングランドの支援を受けアリ・パシャ（Müezzinzade Ali Paşa）が総指揮をとったが，200隻のガレイ船と約30,000人もの船員を失い[30]完敗であった。

25）Black, J. B., *op. cit.*, p. 89.
26）*cf.* Pollard., A. F., *op. cit.*, p. 298.
27）*cf.* Guilmartin, J. F., *op. cit.*, p. 273.
28）一般のガレアス船は，長さ約135フィート，幅23フィートであるが，1571年のレパント海戦で使用されたヴェネツィア海軍のガレアス船は，長さ約160フィート，幅40フィート以上のものであった。Guilmartin, J. F., *op. cit.*, p. 233.
29）In J. A. Froude, ed., *History of England,* 10, *op. cit.*, p. 344.
30）Parker, G., *op. cit.*, p. 88.

ここで両陣営の軍事力を比較する。すなわち表Ⅰ．1571年におけるカトリック同盟艦隊とオスマン＝トルコ艦隊との比較，を表出する。

表Ⅰ．1571年におけるカトリック同盟艦隊と
オスマン＝トルコ艦隊との比較

	カトリック同盟艦隊			オスマン＝トルコ艦隊			
	指　揮　官	ガレイ船（隻）	ガレアス船（隻）	指　揮　官	ガレイ船（隻）	小型ガレイ船（隻）	小型快速船（隻）
左翼隊	Agostin Barbarigo	53	2	Uluj Ali Paşa	87	8	－
中央隊	Don Juan of Austria	64	2	Müezzinzade Ali Paşa	61	32	－
右翼隊	Gian Andrea Doria	54	2	Mehmet Suluk Paşa	54	2	－
予備隊	Don Alvaro de Bazan	30	－	――――――	8	22	64

Source: Guilmartin, J. F., *Gun Powder and Galleys*, Cambridge University Press, Reprinted, 1980, p. 242と p. 245から作成。

カトリック同盟艦隊が大勝利を得た要因は，４つあるように思われる。

第１は，教皇ピウス５世の布教熱意である。他のカトリック教の国王から無視されていたヴェネツィアの救援を受け入れたのは，そのいい例である。またこの布教熱意は，同盟艦隊最大のスペイン海軍をも引き入れたのである。

第２は，カトリック同盟艦隊，すなわちヴェネツィア艦隊所有のガレアス船６隻の威力である。キャノン砲装備のガレアス船の登場までの戦いは，ガレイ船どうしの戦いであった。ガレイ船の戦いは，自国船の船首から突き出ている青銅製の衝角（ラム）を，敵艦の舷側に突きあてて，そこにダメージを与えるか，あるいは上甲板からの大砲によって敵艦を威圧したりダメージを与えるという戦い方であった。

だが，ガレアス船の登場で戦術は，180度変わったのである。大型で，両舷側にキャノン砲を装備しているので重量がかなり重くなり，その分こぎ手を増やさなければならなくなったり，速度が遅くなったり，こまわりが利かなくなったのであるが，“Broadside（片舷斉発（せいはつ））”，すなわち片舷側からキャノン砲による一斉射撃ができるようになったのである。このガレアス船の登場で，イングランドの支援があったにもかかわらず，オスマン＝トルコ艦

隊は，スペイン海軍を中心としたカトリック同盟艦隊に接近することなく，追い散らされるようにして撃破されていったのである。

第3は，カトリック同盟艦隊総指揮官・智将ドン・ジョンの適切な指揮とすぐれた戦術とである。このことに関しては，智将ドン・ジョンの戦略行動を顧みれば，すぐにわかることである。智将ドン・ジョンは，オスマン＝トルコ艦隊と同レベルのガレイ船を前衛に出し直接に衝突させたのではなく，キャノン砲装備のガレアス船を前衛にして戦ったことである。それと表Ｉからもわかるように，指揮官を有する予備隊を重要な戦術部隊として考えていたことである。

第4は，カトリック同盟艦隊の指揮官の指揮能力が高かったことである。智将ドン・ジョンの指揮統率や適確な判断がいかによくても，その下で実際に動く指揮官が，それなりによく反応しないと勝利をもたらせないからである。

以上の要因において，ガレアス船を中心にしたカトリック同盟艦隊，すなわちスペイン海軍が大勝利を得たのである[31]。その後の結果について，ヴェネツィアは，多少不満が残るものの[32]，ヴェネツィア海軍がはたした役割は，かなりなものがうかがえるのである。

このレパント沖の海戦は，ガレイ船どうしで戦った最後の戦いであり，また中世最後の十字軍の戦いでもある。この戦いによって地中海の制海権は，スペインを中軸とするヨーロッパ側に傾きはじめたのである。この海戦でスペインは，地中海の制海権を奪取できなかったが[33]，海軍力世界№1の地位

31）*cf.* Pollard, A. F., *op. cit.*, p. 311.

32）1570年キプロス島の軍事的制圧に端を発した1571年のレパント海戦は，ヴェネツィアを含むスペインを中心としたカトリック同盟軍が大勝利を収めたのである。だが，その後カトリック同盟軍が，軍事力強化に努力を怠ったり，またオスマン＝トルコ軍が艦隊を再建させたことによって，ヴェネツィアは，1573年にオスマン＝トルコと単独講和を締結せざるをえなくなったのである。結果的には，ヴェネツィアはキプロス島を奪回することができなかったのである。

33）一般的に，スペインがこのレパント海戦の結果，オスマン＝トルコ艦隊を全滅させて地中海の制海権を掌握したと考えられているが，これは誤りであるように

（次頁脚注へ続く）

を誇示したのである。もしこのとき，フェリペII世がガレイ船をすべて翌年の1572年に，ネーデルランド沖のゼーラントの戦いに集結させていたら歴史は変わっていたであろう。このことに関して，フェリペII世の政策ミスがうかがえるのである。

スペイン海軍は，このネーデルランド沖において，「海乞食」によってかなり苦しめられていたのである。

この「海乞食」がゲリラ戦法を続けることができた背景には，オラニエ公ウイレムからスペイン商業への攻撃が認められていたり[34]，イングランドからの経済的，軍事的援助があったからにほかならないのである。たとえば，「海乞食」からマルク（La Marck）のような有名な海賊が現われたり[35]，エリザベスI世から軍資金が送られていたのである[36]。

「海乞食」は，操船技術にヨリたけていたように思われるのである。というのは，海のゲリラである「海乞食」は，生きるために海賊行為を行わなければならなかったからである。この海賊行為を行うにあたっては，スペイン海軍よりもネーデルランド沖のゼーラントについてヨリ熟知しておかなければならないし，また機動力に富む船舶の操船技術についてもヨリ熟達しておかなければならないからである。

このような「海乞食」のゲリラ戦法によって，スペイン軍は，ネーデルランド北部より撤退しなければならなくなったのである。そこでフェリペII世

思われるのである。というのは，1571年のレパント海戦で，スペイン海軍が軍事力世界№1になったが，地中海の制海権に関して，注32）のようにヴェネツィアが1573年にオスマン＝トルコと単独講和を締結したことにより，依然としてキプロス島がオスマン＝トルコ領になっていたからである。そこで，軍事的要衝であるキプロス島がオスマン＝トルコの手にある限り，スペインは，この地中海の制海権を獲得したと見なさない方が良いのである。実際オスマン＝トルコは，このレパント海戦後，自国海軍の衰退を来すのであるが，依然としてキプロス島を含む東地中海で商業活動を続けていたのである。

34）Black, J. B., *op. cit.*, p. 128.

35）*Ibid.*, p. 128.

36）Reign of Elizabeth Pt. V, in James Anthony Froude, ed., *History of England,* 11, Ams Press, Inc., 1969, p. 13.

は，ネーデルランド北部の反政府軍を壊滅させるために，1573年再び艦隊をそこに集結させたり，アルバ公を指揮能力なしと判断し，レパント海戦の立て役者であった猛将レクェセンス（Don Louis de Requescens）を，派遣させたのである。

だが，これらはいずれも，イングランド政府に支援を受けている「海乞食」やカルヴィン教徒たちを，鎮圧するという結果をもたらさなかったのである。むしろこれにかかった戦費を捻出させるために，1576年スペイン陸軍がアントベルペン（Antwerpen）を略奪したことによって，ネーデルランド市民の憎悪をただ単につのらせる結果になったのである。そのような結果になった最大原因は，オラニエ公ウイレムの２人の弟・ルイ（Louis）とヘンリー（Henry）との殺害[37]，それに1576年のレクェセンスの突然の死[38]である。

このネーデルランド市民の憎悪は，たびたびスペイン海軍の侵略を受けていた北部７州において，特にひどかったのである。この憎悪のエネルギーが，1581年のオランダ独立宣言へと進んでいったのである。

この1581年のオランダ独立宣言は，ネーデルランドの北部７州のプロテスタントだけが，1579年に準備し「ユトレヒト同盟（The Union of Utrecht）」[39]を結成して行ったものである。オランダの独立宣言は，スペイン帝国の威信にかかわるものであり，フェリペⅡ世は，「海乞食」を全滅させてどうしてもそれを撤回させたかったのである。フェリペⅡ世がこのように考えた背景には，経済的に見てイングランドとの貿易は非常に重要であるが[40]，ユトレヒト条約によってスペインの植民地がますます，イングランドによって危険にさらされるようになったからである[41]。

37）*Ibid.*, p. 19.
38）*Ibid.*, p. 43.
39）Pollard, A. F., *op. cit.*, p. 349.
40）Lipson, E., *The Economic History of England,* Vol. Ⅱ, Second Edition, Adam and Charles Black Ltd., London, 1934, p. 365.
41）Rich, E. E., Colonial Settlement and Its Labour Problems, in E. E.

（次頁脚注へ続く）

この「海乞食」を全滅させるためには，スペインは，彼らに対するイングランドからの経済的および軍事的援助を断ち切らなければならないのである。要するに，スペインは，イングランドに宣戦布告し，イングランドの勢力を縮小させなければならないのである。

イングランドは，このようなことを当然の結果として受けとめていたに違いないのである。というのは，イングランドの女王メアリーⅠ世（Mary Ⅰ）がフェリペⅡ世と結婚した当時，両国はカトリック教国で非常に緊密な状態にあったが，彼女の死後，プロテスタントのエリザベスⅠ世が王位を継承してから，宗教的な行き違いがあったり，またエリザベスⅠ世がフェリペⅡ世の求婚を断った[42]りして険悪なムードになっていたからである。ましてイングランドが，スペイン領のネーデルランドからオランダが独立するのを支援していたからである。

フェリペⅡ世にとっては，イングランドに対する不満，いや激怒が募るばかりであった。この激怒が最高潮に達したのは，エリザベスⅠ世が王位継承問題で，1587年にスコットランド女王メアリー・スチュアート（Mary Stuart）を処刑したときであった[43]。そこでフェリペⅡ世は，世界最強の海軍，すなわちスペイン艦隊をリスボア（Lisboa）のテージュ川（Tejo Rio）河口に集結させ，アルマダなるものを編成させたのである。

なぜフェリペⅡ世は，イングランドを征服するために，世界最強たるスペイン艦隊をリスボンに集結させ，アルマダなるものを編成させなければならなかったのであろうか。そのことは，ただ単にフェリペⅡ世の激怒からきているのであろうか。いや，フェリペⅡ世の個人的な感情もたぶんあろうが，もし戦争になれば，かなりの国民が犠牲になるので，その点十分考慮に入れて，アルマダを編成したのであろう。それは，いままで論述したように6つの戦争原因が考えられるのである。それを要約すると，以下のようになる。

Rich and C. H. Wilson, eds., *The Cambridge Economic History of Europe,* Vol. Ⅳ, Cambridge University Press, Reprinted, 1980, p. 356.

42) Black, J. B., *op. cit.,* p. 37.

43) Robinson, C. E., *op. cit.,* p. 230.

アルマダ編成の原因

1．フェリペⅡ世が，完璧な帝国を完成させたかったこと。

2．フェリペⅡ世が，エリザベスⅠ世に再婚を断られたこと（1558年）。

3．イングランドが，「海乞食」に援助を与えていたこと（1567年頃）。

4．イングランドが，レパント海戦でオスマン＝トルコ側についていたこと（1571年）。

5．イングランドが，オランダ独立宣言に支持したこと（1581年）。

6．エリザベスⅠ世が，メアリー・スチュアートを処刑したこと（1587年）。

ここで少し補足しなければならないことがある。それは，エリザベスⅠ世とフェリペⅡ世とのかかわり合いである。

エリザベスⅠ世とフェリペⅡ世との関係は，フェリペⅡ世が結婚を申し込んだことからもわかるように，非常に仲の悪い間柄ではないように思われる。まして国家を巻き添えにしてまでも戦争に挑むような仲の悪さではなかったように思われるのである。

ではなぜ，スペインがアルマダを編成してまでも，イングランドと交戦状態になったのであろうか。

2人の出会いは，フェリペがまだスペイン王を継承していない1554年のプリンスのとき，すなわちイングランドの女王であったメアリーⅠ世と結婚するためにイングランドに赴いたときである。フェリペは27歳，メアリーⅠ世は38歳，エリザベスは21歳であった。フェリペは，政略結婚のためメアリーⅠ世に近づいたものであり，もっぱら彼の興味は，メアリーⅠ世よりも17歳年下，自分よりも6歳年下のエリザベスであったように思われる。この政略結婚は，スペイン領土拡大のため，いいかえるとスペイン帝国を完成させるために，当時のスペイン王カールⅤ世とその息子フェリペがもくろんだことである。このことが本当であったかどうかは，その後のフェリペⅡ世の行動を見れば，すぐに納得できるのである。すなわち，メアリーⅠ世が1558年11月17日に42歳で亡くなるや，その3日後，20日にイングランドの王位を継承

したエリザベスⅠ世に，自己の野望のため結婚を申し込んだ[44]ことからもわかるであろう。

この1558年以降，エリザベスⅠ世とフェリペⅡ世との間に，好きか嫌いかは別として，政治上および宗教上微妙に食い違いはじめてきたのである。いいかえると，両者とも国家元首たる立場からこのような行動をとらなければならなかったのである。

この両者の対立的立場が実際に表面化してきたのは，スペインがロンドンと商業上重要なアントベルペン[45]を略奪したときからであり，また決裂状態がひどくなったのは，メアリーⅠ世がイングランドの王位継承の権利をフェリペⅡ世に遺言していたときからである[46]。

そこでフェリペⅡ世は，公然と自己の野望を貫徹するために，アルマダを編成させたのである。

以上のようなアルマダ編成の原因は，宗教的および政治的なものである。では，それ以外のもので何があるかといえば，商業的かつ経済的なものがある。すなわちアルマダ編成の原因として，上述6つのほかに7として，イングランドの海賊フランシス・ドレイク（Francis Drake）が，スペイン船舶を襲撃したことがあげられるのである。

イングランド政府は，自国の経済的発展のため，アメリカの植民地をヨリ多く獲得したり，またそこから金銀を満杯に搭載しているスペイン船舶を海賊におそわせたのである。特にひどくなると，自国の王立海軍に「報復的拿捕認可状と私掠免許状」[47]とを与え，海賊行為をどしどし奨励することによ

44）*cf.* Guy, J., *Tudor England,* Qxford University Press, 1988, p. 260.

45）*cf.* Dietz, B., Antwerp and London : the Structure and Blance of Trade the 1560s, in E. W. Ives, R. J. Kneckt and J. J. Scarisbrick, eds., *Wealth and Power in Tudor England,* University of London, The Athlone Press, 1978, p. 186.

46）Guy, J., *op. cit.*, p. 335.

47）Pearce Higgins, A., International Law and the Outer World, in J. Holland Rose, A. P. Newton and E. A. Benians, eds., *The Cambridge History of the British Empire,* Vol. Ⅰ, Cambrige University Press, 1929, p. 188.

って，スペイン経済にかなりの打撃を与えていたのである。

実際エリザベスⅠ世は，1581年海賊ドレイクにナイト（Knight）の称号[48]を与え，公然と海賊行為を奨励するとともに，その戦利品の利益から王立海軍を組織化していったのである。また，このイングランド王立海軍は，海賊を組織の中に加え，実践に強い王立海軍へと発展していったのである。

では，リスボア川河口で編成されたアルマダは，どのような組織になっていたのであろうか。

フェリペⅡ世がアルマダを編成させた原因は，上述のごとく良く納得できるが，現実の問題として，イングランド海峡の制海権を獲得することが急務であったにちがいないのである。というのは，ネーデルランド沖，すなわちイングランド海峡にはオランダ海軍の基礎になった「海乞食」やイングランド王立海軍を強化した海賊たちがのさばり回っていたのであり，彼らの排斥なしには，とうていスペイン帝国の完成など考えられなかったからである。

そこで，まずはじめにアルマダは，イングランド海峡の制海権を奪取するためにリスボアで編成されることになったのである。だが，この編成は，すでに1587年に行われていたのであるが，いざ出陣の時期になるとドレイクが，カージス（Cádiz）港でアルマダを奇襲したため，1年後の1588年まで出陣が遅らされたのである[49]。ではなぜ，ドレイクがイングランドから近いリスボア港ではなくて，それよりも遠いカージス港を奇襲したのであろうか。それは，リスボア港がアルマダの最終作戦指示地であり，カージス港がアルマダの軍備・食料の調達地であったからである[50]。リスボアおよびカージス港での巨大な軍事力の準備は，極秘にされていたのではなく，ヨーロッパ人すべてが知っていた事実なのである[51]。

---

48) In J. A. Froude, ed., *History of England,* 11, *op. cit.*, p. 402.
49) Guy, J., *op. cit.*, p. 339.
50) Corbett, J. S., *Drake and Tudor Navy,* Vol. Ⅱ, Temple Smith, 1988, p. 73.
51) *cf.* Froude, J. A., *The Spanish Story of the Armada,* Reprinted, Charles Scribner's Sons, 1972, p. 16,

ではなぜ実際に，ドレイクをカージス港破壊へと駆り立てたのであろうか。その背景には，3つの理由が考えられるのである。

第1は，1554年メアリーI世がフェリペ王子が結婚したことによって，父エドマンド（Edmund Drake）が職を失ったからである。熱心なカトリック教徒であるメアリーI世が結婚によって，イングランド国内をすべてカトリック教徒にしようとしたのである[52]。メアリーI世は，プロテスタントに対し「流血のメアリー」[53]と呼ばれるくらい迫害を与えていたのである。このことによって，プロテスタントの海軍礼拝堂勤務の牧師（Naval chaplain）をしていたドレイクの父エドマンドが，当然のごとく職を失う[54]結果になったのである。この1554年当時，ドレイクは，エドマンド夫妻の10歳過ぎの長男として，宗教上の問題から，父が職を失ったことにかなりショックを受けたのである。

第2は，1565－1566年にドレイクがジョン・ホーキンズ（John Hawkins）船団の1員[55]として，はじめて航海に出たのであるが，そこでの取引相手のスペイン人にだまされたからである。ドレイクは，20歳半ばにして12人弟妹の長男として生活費を助けるために，ホーキンズの仲間に加わることによっ

52）Pollard, A. F., *op. cit.*, p. 123.

53）Gill, C., Drake and Plymouth, in N. J. W. Thrower, ed., *Sir Francis Drake and Famous Voyage, 1577－1580,* University of California Press, 1984, p. 80.

54）*Ibid.*, p. 80.

55）ドレイクは，1566年にホーキンズ船団に加わり，最初の航海に出航したのである。ドレイクは，ホーキンズを頼って彼の船団の1員になったが，この航海では，ホーキンズは乗船していなかったのである。というのは，ホーキンズにとってはこの航海が第3回目のものになるはずであったが，イングランドのスペイン大使が，ホーキンズが西インド諸島で海賊行為をする恐れがあるとして，イングランド政府に対して彼の身柄を拘束するように願い出ていたからである。そこでこの航海は，ホーキンズ抜きでロベル（Lovell）を船長として出航したのである。

このスペイン大使の恐れというものは，実際問題として海賊行為を行っているホーキンズの行動を，公的立場から否定したのである。その背後には，スペインとイングランドとの外交問題がこじれてはいけないとするスペイン大使の心遣いがあったからにほかならないであろう。

て，多大な利益を得ようとしたのである。その利益は，確かに得るには得られたが，最初の航海，すなわち奴隷貿易で身の危険をさらされたのである[56]。いいかえるとドレイクは，リオ・デ・ラ・アチャ（Rio de la Hacha）での奴隷売買で，取引相手のスペイン人，いわゆるカトリック教徒による不当な行為によって精神的なダメージを受けたのである。

第3は，1568年にハリケーンのため寄港したメキシコの東岸，ベラクルス外港のスペイン植民地サン・ファン・デ・ウロア（San Juan de Ulúa）で，スペイン艦隊に奇襲されたからである[57]。カリブ海航海中，いくたびとハリケーンに見舞われ，仕方なく食料と飲料水の補給，船舶の修理のため立ち寄ったサン・ファン・デ・ウロアで，メキシコの新副王ドン・マーチン・エンリクェツ（Don Martin Enriquez）とフランシスコ・ル・ルクザン（Francisco de Luxan）との「裏切り行為」[58]によって，奇襲を受けたのである[59]。サン・ファン・デ・ウロアでのこの奇襲において，ドレイクは，スペインのカトリック教徒がますます信じられなくなり，彼らに対する憎悪の念を復讐心へと変えていったのである[60]。

以上のようにドレイクの生まれた環境から判断すると，幼少のころからカトリック教，すなわちスペインに対し，かなり強い復讐心に燃えていたことがわかるのである。

そこでドレイクは，1587年4月にエリザベスⅠ世の直属軍艦4隻[61]をはじ

56) Corbett, J. S., *op. cit.*, Vol. Ⅰ, p. 94.
57) Gill, C., *op. cit.*, p. 84.
58) Corbett, J. S., *op. cit.*, Vol. Ⅰ, p. 118.
59) *cf.* Hakluyt, R., *The Navigations Voyages Traffiques and Discoveries of the English Nation,* Vol. Ⅻ, Augustus M. Kelly, 1969, pp. 49–50.
60) ドレイクのスペインに対する憎悪の念は，やがて復讐心に変わり，その復讐心は，イングランド政府から支援されると，ますます燃えあがり，ついにドレイクを，奴隷貿易商から略奪中心の海賊へと変えていったのである。また，ドレイクの復讐心は，彼を世界初の周航者にしたし，1581年ナイトにも叙せられるぐらいになったのである。
61) *cf.* Kenneth R. Andrews, *Trade, plunder and settlement,* Cambridge University Press, 1984, p. 233.

表Ⅱ．1587年におけるドレイク艦隊

	艦　船　名	トン数	キャプテンおよび所属
1.	Eliz. Bonaventure	550	Sir Francis Drake
2.	Golden Lion	550	Wm. Borough, Vice-Admiral
3.	Dreadnought	400	Thos. Fenner
4.	Rainbow	500	Henry Bellingham
5.	Spy	50	Clifford
6.	Makeshift	50	Bostocke
7.	White Lion	150	The Lord Admiral
8.	Cygnet	25	
9.	Merchant Royal	400	The Levant Company's Squadron
10.	Susan	350	
11.	Edw. Bonaventure	300	
12.	Margaret and John	210	
13.	Solomon	200	
14.	George Bonaventure	150	
15.	Thomas Bonaventure	150	
16.	Minion	200	Drake's Squadron
17.	Thomas	200	
18.	Bark Hawkins	130	
19.	Elizabeth	70	
20.	The Little John	100	Other vessel
21.	The Drake	80	
22.	Speedwell	50	
23.	Post	30	

Source: Corbett, J. S., *Drake and Tudor Navy,* Vol. Ⅱ, Temple Smith, 1988, pp. 67－68. n. 4 から作成。

めとして，計23隻の軍艦を従えてカージス港を奇襲したのである。その23隻の軍艦の内訳は，表Ⅱ．1587年におけるドレイク艦隊，で示すとおりである。

このカージス港奇襲の結果，イングランド王立海軍は，1,300トンの軍艦を含む計36隻のスペイン艦船を撃沈させたのである[62]。特にスペイン軍の旗

62）スペイン艦船36隻を撃沈させたというこの数値は，イングランド側の発表であ
（次頁脚注へ続く）

艦となるべき建造中のガリオン（Galleon）船を破壊したのである[63]。

イングランドのこの大勝利においてスペインは，自国海軍の弱体化を思い知らされたのである。いいかえると，海軍の規模は，以前のとおりイングランドよりもまさっているが，質が著しく劣っていたのである。このことに気がついたスペイン海軍は，フェリペⅡ世に進言して，イングランドタイプの新型ガレイ船を建造するとともに，船員および砲兵隊員の技術向上に力を入れ，強化を図ったのである[64]。

Ⅳ．1588年の対スペイン戦争

スペインは，ドレイクのカージス港奇襲によって，イングランドへの侵攻が1年遅らされたものの，1588年に大艦隊であるアルマダを編成して出陣したのである。

ではなぜ，大国であるスペインが大艦隊であるアルマダを編成しなければならなかったのであろうか。それは，ホーキンズやドレイクがイングランド王立海軍発展のため多大な貢献をし，イングランドがスペイン帝国を脅かすほどの力を持ちはじめていたからである。

フェリペⅡ世にとっては，この力を抑制しない限り，イングランド征服など，とうてい考えられないことなのである。そこでフェリペⅡ世は，この力を封ずるために，イングランドの主要港を制圧，いわゆるイングランド海峡

り，スペイン側の発表では24隻となっている。Williamson, J. A., *Short History of British Expansion,* Second Edition, Macmillan and Co., Limited, 1936, p. 137.

63) Mattingly, G., *The "Invincible" Armada and Elizabethan England,* The Folger Shakespeare Library, 1979, p. 14.

64) *cf.* Holland Rose, J., Sea Power : Ⅱ. National Security and Expansion, 1580－1660, in J. Holland Rose, A. P. Newton and E. A. Benians, eds., *The Cambridge History of the British Empire,* Vol. Ⅰ, Cambridge University Press, 1929, pp. 117－118.

表Ⅲ．1588年5月30日のアルマダ

指揮官および戦隊名	艦船の種類（隻）	
Medina Sidonia Portugal Squadron	Royal galleon Large pinnace	10 2
Don Diego Flores de Valdes Castille Squadron	Indian Guard galleon New Spain Flota Pinnace	10 4 2
Don Hugo de Moncada Neapolitan galleass	Galleass	4
Recalde Biscayan Squadron	Great-ship	10
Pedro de Valdes Andalucian Squadron	Great-ship	10
Oquendo Guipuscoan Squadron	Great-ship	10
Don Martin de Bertendona Levant Squadron	Italian argosies	10
	Pinnace	12
Hurtado de Mendoza	Small oared-craft	22
	Hulk	23

Total	Vessels	（隻）	129※
	Tons	（トン）	58,000
	Guns	（門）	2,500
	Crews	（人）	27,000

Source: Corbett, J. S., *Drake and Tudor Navy,* Vol. Ⅱ, Temple Smith, 1988, pp. 153－155から作成。

※コルベットの本文p. 153では130となっているが，合計すると129なので，129と訂正した。

の制海権を奪取しなければならないと考えたのである。

このことを実現させるためにフェリペⅡ世は，自国のスペイン海軍および同盟国の海軍をリスボア港に集結させて，1588年5月30日にイングランド海峡に向かって出航したのである。

このとき編成されたアルマダは，表Ⅲ．1588年5月30日のアルマダ，で見るとおりである。

表Ⅲから判断すると，ドレイクのカージス港奇襲によって，ほぼ壊滅状態に追いやられたアルマダを，その後急速に建て直すことに成功したようである。このことは，スペインが大国であるがゆえになしえたことであり，また，スペインの経済状態が良好であったこともうかがえるのである。

では，これに対してイングランド王立海軍は，どのような対応策を講じたのであろうか。単に幸運であったドレイクの奇襲をもろ手を挙げて喜んでいただけであろうか。

そうではなくやはり，イングランド王立海軍は，このドレイクの奇襲によって，スペインが反撃に出てくるという危機感を現実に感じとっていたのである。そしてこの危機感が，王立海軍の整備・増強を着実に促したのである。では具体的には，イングランド王立海軍はどのように整備，増強されたのであろうか。それは，表Ⅳ．1588年のイングランド王立海軍，のとおりである。

表Ⅳから判断すると，スペインのアルマダが各地からの寄せ集めであったのに反して，イングランド王立海軍は，大提督ホワード卿の女王艦隊を中心とした王立海軍から成り立っていたことがわかるのである。

また，1588年におけるイングランドとスペインの軍事力を比較すると，すなわち表Ⅲと表Ⅳのトータルを比較すると，表Ⅴ．1588年におけるアルマダとイングランド王立海軍との比較，になる。これを表出すると以下のようになるのである。

この表Ⅴから判断すると，艦船の隻数に関しては，イングランド王立海軍の方が1.5倍，トン数および船員数が0.5倍であり，軍事力の面でアルマダ

表Ⅳ．1588年のイングランド王立海軍

指揮官および戦艦	Ships(隻)	Tons(トン)	Mariners(人)
The Queen's ships, under Admiral Lord Howard of Effingham, consisted of . . .	34	11,850	6,279
Serving with the Lord High Admiral . . .	10	750	230
Serving with Sir Francis Drake . . .	32	5,120	2,348
Fitted out by the City of London . . .	38	6,130	2,710
Coasters with the Lord High Admiral . . .	20	1,930	993
Coasters with Lord Henry Seymour . . .	23	2,248	1,073
Volunteers with the Lord High Admiral . . .	18	1,716	859
Victuallers (store transports ?) . . .	15	. . .	810
Sundry vessels, of which particulars are wanting . . .	7	. . .	. . .
Total	197	29,744	15,302*

Source: Lindsay, W. S., *History of Merchant Shipping and Ancient Commerce,* Vol. Ⅱ, Ams Press Inc., 1965, p. 146.

※リンドセイのp. 146の本文では，15,785となっているが合計すると15,302なので，15,302と訂正した。

表Ⅴ．1588年におけるアルマダとイングランド王立海軍との比較

	アルマダ	イングランド王立海軍
隻数	129（1）	197（1.5）
トン数*	58,000（1）	29,744（0.5）
船員数	27,000（1）	15,302（0.5）

※スペインのトン数は，イングランドのトン数の約⅔である。
Kenneth R. Andrews, *Trade, plunder and settlement,* Cambridge University Press, 1984, p. 231. n. 6.

の方がまさっていた[65]ことがわかるのである。また，アルマダのトン数がスペインのトン数であり，イングランドのトン数に換算すると約⅔のものになる[66]といえども，約38,666トンになり，アルマダの方がやはりヨリまさっていたのである。

アルマダの旗艦サン・マルティン（San Martin）およびイングランド王立海軍の旗艦アーク・ロイヤル（Ark Royal）もどちらも，当時軍艦の最先端技術を誇っていたガリオン船である。

そこで，1588年の対スペイン戦争で勝敗を分けることになったガリオン船の大砲を，表VI. 1580年代におけるイングランドガリオン船の主要備砲，で示す。

では，同じような最先端技術を誇るガリオン船を旗艦としながらも，アルマダが敗北し，イングランド王立海軍が大勝利を収めることができたのはどうしてであろうか。それは，イングランド王立海軍に対し３つの要因があったからにほかならないのである。

まず第１に，イングランド王立海軍が長距離破壊砲であるカルバリン砲を多く装備していたからである。このことは，相手艦船に接近することなく戦えるのである。それに反し，アルマダは，中距離破壊砲であるキャノン砲および近距離破壊砲であるペリアー砲を多く装備していたのである。アルマダの戦法は，敵艦に近づき大砲の撃ち合いによって，勝利を得るというものであった。このことをもう少し詳述すると，イングランド王立海軍の根本的戦術は，とにかく長距離破壊砲のカルバリン砲によって，敵艦を撃沈させるということである。これに対してアルマダは，中距離破壊砲のキャノン砲や短距離破壊砲のペリアー砲によって，敵艦を損傷させ，その敵艦を戦利品として本国に持ち帰るということである。

第２に，1588年の第１回の対スペイン戦争が，すべてイングランド近海で

65）*cf.* Lindsay, W. S., *History of Merchant Shipping and Ancient Commerce,* Vol. II, Ams Press Inc., 1965, p. 146.

66）Andrews, K. R., *op. cit.*, p. 231. n. 6.

表VI. 1580年代におけるイングランドガリオン船の主要備砲

大砲の分類および種類	口径(インチ)	重量(ポンド)	砲身(フィート)	
I. キャノン・プロパァー砲：18〜28口径の中距離破壊砲				
(ダブル・キャノン ロイヤル・キャノン)	8.5	65	12 or 13	M. L. (前装砲)
ホール・キャノン	8	60	11	M. L.
デミ－キャノン	6.5〜7	30	10	M. L.
II. カルバリン砲：32〜34口径の長距離破壊砲				
ホール・カルバリン	5〜5.5	17	13	M. L.
デミ－カルバリン	4.5	9	12	M. L.
セーカー	3.5	5	11	M. L.
ミニオン	3	4	8	M. L.
ファルコン	2.5	3	7	M. L.
ファルコネット	2	1.5	6.5	M. L.
ロビネット	1	1	－	M. L.
ベーゼス	1¼	－	4 (薬室9インチ)	B. L. (後装砲)
III. ペリアー砲：6〜7口径の短距離破壊砲				
キャノン・ペリアー	6	24	－	M. L.
ペリアー・プロパー (デミ－キャノン・ペリアー)	5	－	－	M. L.
ポート・ピース	5.5	－	16インチ (薬室3.5インチ)	B. L.
ストック・ホウラー	4	－	－	B. L.
ホール・スリング	2.5	2.5	(薬室22インチ)	B. L.

Source: Corbett, J. S., *Drake and Tudor Navy*, Vol. I, Temple Smith, 1988, pp. 364－365の本文から作成。

行われたからである。このことは，当然，地形・風向き・海水の流れの点で，イングランド王立海軍の方がアルマダよりも，ヨリ適確に判断できたのである。

第3に，海戦の戦術および士気について，イングランド王立海軍の船員がアルマダの船員よりも，ヨリ適確にかつ着実に反応したからである。いくら有能な指揮官でも，その下で動く船員がかなり訓練されていなければ，無意味なことなのである。

これら3つの要因が十分に成果をあげ，イングランド王立海軍を大勝利へと導いた背景には，“イングランド王立海軍の創始者”であるヘンリーⅦ世，および“イングランド王立海軍の父”であるヘンリーⅧ世の努力があったからである。

V．おわりに

16世紀中葉から後期にかけて，全世界を制覇しようとしたフェリペⅡ世は，その野望を実現化させるために，まずはじめに地中海およびイングランド海域の制海権を獲得しようとしたのである。この制海権を獲得するということは，当時の植民地獲得競争において，優位および独占ということを意味しているのである。スペインがこのことをヨリ現実的なものにするには，当時№2の海軍力を誇っていたイングランドの頭を押えるしかなかったのである。

反対にイングランド側においては，自国の近海および植民地航路の制海権を奪取することによって，植民地獲得競争を他国よりも1歩ぬきんでたいと考えていたのである。

ここには，当然，スペインとイングランドとの衝突が生じるのである。

1588年での第1回のイングランドとスペインとの大規模な衝突，いわゆるイングランド王立海軍とアルマダとの戦いは，アルマダの方が勝算が大であった。だが実際は，イングランド王立海軍の方が勝利を収めることができた

のである。

このことについて1つ注意しなければならないことは，イングランド王立海軍がアルマダを敗北させることによって，即，イングランドの近海および植民地航路の制海権を奪取したということではないのである。いいかえると，イングランド王立海軍は，ヘンリーⅦ世とヘンリーⅧ世との努力の結果が現われはじめてきて，勝利を収めることができたのであり，全世界の海軍に対し№1になったわけではないのである。このことは，1588年のアルマダの敗北によって，スペイン海軍が2度と再建できないほどダメージを受けていなかったことからも判明できるのである。具体的には，1588年のアルマダの敗北後，すぐに海軍の再建に乗り出し，その後4回イングランドと戦争を行ったのである。

1588年のアルマダな大規模なものであったが，この敗北したアルマダは，全スペイン海軍ではなかったのである。いいかえると，スペインは，この1588年のアルマダの敗北によって，帝国全体が壊滅したわけではなく，依然としてスペイン帝国は，全世界№1の地位に君臨していたのである。